

よく、ころころ転がっている小石を森の中で見つけて集めていた。

楽し気にしてそんなことをしていると、外套を纏ったおじさんがいつものように私の協力をしてくれる。楽し気に楽し気に。

なんで、とは聞いてこなかった。私がなにかをしていることに特に言及するほどの意味もなかったのかもしれない。ただ、私はそれでも良かったのだと、今でも覚えている。

そんなにも面白いものを集めたんだね。おじさんは負けたなあ。

どうしてそんなに集めるんだい。おじさんは勝てないなあ。

よくわからないと、おじさんに言いたくなる。ただ。

私はよく泣いていた。

家に帰って、集めた小石を床に並べてそれを遊びのように転がしてそして泣くのだ。

小石集めは楽しい。だけど、独りは哀しい。哀憫。

感情の発露をしなければならぬのか、と思った。泣き叫べばということなのだろうか。

そのとき、おじさんの表情が気になった。

おじさんはいつも楽し気に、どんな表情だったのかは忘れたけど、でも楽しげだっただけは思い出せた。

おじさん。ありがとう。

どうしてか、おじさんの将来を知ってしまったことが今の私に、楽し気な遊びを考えてくれ

たのかもしれない。

その小石はよくいう何かの原石だから私は集めていたのだと、ふと思い出した。

おじさんはもしかしたら原石を集めていたから楽しかったのだろうかと考えてしまうのだろうか。わからない。

でも、私は何かの原石を集めていたこと自体に楽しいことを見出すのではなく、おじさんと一緒にいられたということが楽しいとわかったのだ。

だから、泣き叫ぶのはとても大事ではない。とてもじゃないが、泣き叫べば私はおじさんによく見られているかもしれない。

よく？

ああ、そうか、そうともいえないわけだ。

私は無心で集めていた時の大切な友達と思っていたのだ。

おじさんのことを今でも思い出せば心が落ち着く。

それだけだったんだ。

今日も小石を集めている。綺麗な原石はたくさんある。

そして今日こそ、おじさんに言おう。

ねえ、おじさん、私ね――。